

因縁

信心は智慧である。

この、内に開かれたる智慧の眼は、因縁を照見する。すべてのものは因縁によつて生じ、因縁によつて滅する。因縁果の規定によらずして存在する何物もない。善縁は善因を引いて善果を生じ、悪因は悪縁によつて悪果を招く。したがっていかに善を行じたつもりでも、悪果すなわち苦を招くならば、善ではなくて悪であつたのである。凡夫の善悪の諸行は、皆いわゆる有漏煩惱うろうぼであるから六道生死の苦果を招くのである。

われらは今生死海にあつて苦を受けている。何によつて苦果を受けるのであるか。過去世久遠劫来の煩惱の因によるのである。この久遠劫来の流転の真相を信の智慧が見いだしてゆくことを機の深信というのである。この内なるわが相がそのまま外に展開されたものが、今私が住んでいるこの世、すなわち五濁悪世なのである。内に感ずれば煩惱成就のわが身、外に感ずれば五濁悪世、この正報と依報とは、ともにわが久遠劫来の宿業の所感である。六道生死の苦果を招くものである。皆ことごとくわれと無関係のものはない。何というなつかしいこの世であろう。枯れても破れても、日本に生まれてくるべき因縁によつて日本に生まれたのである。私が泣けばすべてが泣く、私が笑えばすべてが笑う。お前が病むから私も病む。私が苦しむからお前も苦しむ。依正一如、内外相応、具体的生活がそこにある。

仏様のお慈悲がわかるまでは、自分が自分であることがいやだつた。自分の身の上¹を呪い、世の中を呪い、運命を悲しみ、はては自暴自棄に陥り、人生に反逆し、親に反逆し、すべてに反逆するよりほかはなかつた。後になつてみれば、それは我慢我欲名利煩惱のしわざであつた。この世には、楽を求めて来たのでも、名をあげに来たのでもなかつた。

静かに見よ。路傍の山草の一本でも、お前のようなだらしない者がいるか。みんな皆、知られようが知られまいが、皆独一の光を放つて精一ぱい生きているではないか。松は松になるよりほかに道はない。杉は杉になるよりほかに生き方はない。皆必然の道を生きている。それなのに人間たるお前は、お前のだらしなきの責任を他の上になすりつけ、苦悩に沈めば沈むほど世を悲しみ、人を責める。因縁道がわからないからだ。

仏様のお慈悲がわかつて、はじめて私は、ほんとうにはじめて私が私を抱く、小さかろうと、愚かだろうと、悪人だろうと、はじめて合掌して私が私を受け取る。私が私を背負つて大地に合掌する、天もそのまま、地もそのまま、いつさいすべてそのままになつかしいわれとわが身の上、その久遠劫来の我、眩劫こゝろより以来常に没し常に流転して、出離の縁あることなき運命そのままを受け取つて、大地に合掌する時、私が私を抱いたと思つたままが、親の大慈悲に抱かれ、大慈悲に攝取されていたのであつた。

何たる大因縁であろう。大慈悲に摂取されたからこそ、悪人でございました、愚人でありましたと、自己の全存在を背負いつつ、全我を投げ出して大地に手をつくことができたのである。「たまたま行信を得ば遠く宿縁を喜べ」、宿業に泣いた子が、今、久遠劫来の宿縁をよろこぶ。念仏しつつ因縁をよろこぶ。何たるいい時に生まれたものか。何たるいい所に生まれたものか。それはかかつて一人の善知識に会いたことである。二十九年孤独の我に泣いた聖人が、吉水の法然上人におあいなされた時、その時、宿業に泣くそのままの上に、久遠劫来のみ光による大因縁がおおいかさつてきたのであった。み光の大因縁がつつんでしまったのである。

光明（縁）と名号（因）との因縁和合によつて大信心が生まれたのである。生まれた信心の子は、名号の父と光明の母とによつて育てられてゆく。これを光号両重因縁という。一人の善知識に会うた因縁、必然に迫ってくる教え、信ぜずにはいられない教え、手を大地につかしてしまつた教え、ついで念仏さしてしまつた教え。浄土真要鈔に言わく。

「しかれば仏法を聞きて生死を離るべき源はただ善知識なり。このゆえに教行証文類の第六に諸経の文を引きて善知識の徳をあげられたり。いわゆる涅槃経には『一切梵行の因は善知識なり。一切梵行の因無量なりといえども、善知識を説けばすなわちすでに撰尽しぬ』といい、華嚴経には『なんじ善知識を念ぜよ。われを生ずること父母のごとし。われをやしなうこと乳母のごとし。菩提分を増長す』といえり。このゆえに一度その人に随いて仏法を行ぜん人はながくその人をまもりて彼の教えを信ずべきなり。」

仏法のありがたい因縁は善知識にあうことにはじまる。そして宿業流転の因縁が信仏因縁に包まれてしまつた時、因縁に泣いた子は、はじめて因縁を喜ばしていただくことである。そして悲しい過去も、失敗の過去も、苦しみも何もかも、この一大事因縁が生かして下さるのである。

思うに私は今多くの念仏の御同胞をいただくことができた。もしお念仏の道がなかったならば遠近の多くの御同胞、血よりも濃い血によつて結ばれたこの浄華の園を拜むことはできないことであつた。しみじみと有難い因縁を感謝せずにはいられない。ただ何事も因縁である。会うもいんねん、別れるもいんねん、殺し合うような因縁でも仕方がないのに、み仏の大悲真実によつて結ばれた因縁を喜ばずにはいられぬ。

かくて因縁道の諦観たいかんは不思議に私をしてあるがままの人生に随順させて下さる。しかるに人生に随順し、自己に随順するものは、人生を超越せしめ、自己を超越させて下さる。この自己超越の道こそ、本願の道であつた。われらの自己超越の唯一の立場こそ如来本願力の道であつた。聖人はこれを横超の直道とおおせになつた。

自己が自己を越えるとは、自己が自己になりきることである。まことに本願の世界は、自然法爾なる青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光の世界である。青黄赤白の個性は宿業の因縁、光は如来の智慧光、この光、個の自力我執を絶対否定して、あるがままの差別因縁を生かしたものである。われらは宿業の因縁を背負い、割り切

れぬ矛盾をそのままに、大悲本願界に飛び込むのである。信仏因縁こそ人生最後にして最初なる一大事因縁である。一切志願満足の真実経験である。

聖人御本典にいわく「ここに愚禿積の親鸞、慶ばしきかなや、西藩月氏の聖典、東夏日域の師釈に遇いがたくして今遇うことを得たり、聞き難くしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して特に如来の恩徳の深きことを知んぬ、ここをもつて聞く所を慶び、獲る所を嘆ずるなり矣。」と。

聞法の因縁を喜びたもうこと絶対である。そこにのみ真宗念仏の世界が開ける。

しかるに多くの老聞法者たちは、一生を聞法に費しつつ、念仏の間にはただこれ愚痴不平をならべ、わずかに聞き覚えたる法をもつていいわけしつつ、無明闇黒のうちを終わるのはなぜであるか。それはただ、聞法の因縁が久遠劫来の大因縁であることを見知らず、曠劫已来はじめての一大事因縁であることを知らぬがためである。宿業の因縁は、たとい金殿玉楼であろうとも苦因に過ぎず、嫁の思うにまかせぬは、おのれの鬼の影と見え、現実生活においては、大悲の念仏をもつて人に接せず、因縁を悲しむ氷の冷たさがその周囲を陰惨なものにしているのがわからないのである。因縁を喜ばぬ人の周囲に何でも因縁を喜ぶ人が生まれよう。暗き老念仏者よ。たとい口先でもいい、念仏しつつ「私ほどしあわせ者があるものか」と言ってみるがいい。大聖世尊も無量寿より外にあるのではない。われらまた世尊七高僧と一味平等に名号をいただいているではないか。因縁を喜べば賤が伏屋も月円かに照らして、真実幸福ここにあり。この絶対幸福の人、はじめて真に人生に泣くこともできるであろう。ああ、因縁の問題の解明。それは人生そのものの解明である。因縁に泣く子よ、正法を聞け。